



渡辺一夫著作集 11



筑摩書房



渡辺一夫著作集11 偶感集 中巻

一九七〇年九月十五日 初 版第一刷発行
一九七六年十月十日 増補版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四二二三

印刷 株式会社精興社

製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七六

(分類)1398(製品)74811(出版社)4604

偶感集 中巻 目次

端 書 3

A 偶感集（一九四九年—一九五一年）

a 折にふれて

辰野先生のこと 8

露伴先生のこと 11

古典と僕 14

戯作者の精神 19

平田篤胤の「大和魂」について 26

僕の語学修業 34

自由について 46

服装の効用について 57

宿命について 62

ガーター勲章について 67

教養について 77

貝殼追放について	80
一高的精神に悩まされた旧一高生の弁	86
架空旅行記	90
架空アメリカ留学記	96
絵画と僕	107
ラジオと僕	114
「親孝行」の告解	118
祖父志願者にされた話	127
読書の思い出	134
寛容 レランス は自らを守るために不寛容 アントレランス に対して不寛容 アントレランス になるべきか	162
宛名のない手紙	175
平和に耐えること	192
b あのこと	
偽日記抄 二(一九四九年)	202
『きけわだつみのこえ』の序	209
似而非党員の告解	215

忌むべき郷愁 ノスタルジヤ について	220
-----------------------------------	-----

学生ストについてなど	228
------------	-----

「新東京音頭」で浮かれては困ることについて	236
-----------------------	-----

三人の青年について	241
-----------	-----

あの手のぬくもりは	247
-----------	-----

はじめはじめしたはなし	256
-------------	-----

将棋やボクシングや	266
-----------	-----

師匠と弟子	278
-------	-----

二つの死の影の下で	289
-----------	-----

若い地質学者の変身	296
-----------	-----

B 偶感集（一九五二年—一九五五年）

a 折にふれて

ベストと竜	310
-------	-----

羊の寓話	314
------	-----

水洗便所の効用	318
---------	-----

笑いの制裁力	322
--------	-----

私の卒業論文	334
文学者と社会	337
後の世の人々・我ら	345
『杜甫ノート』にふれて	348
「不戦の誓い」の日の感想	350
岸田先生のこと	354
内藤濯先生のこと	357
ボワソナード先生	361
新卒業生の一人への手紙	367
雑草録	373
立ちどころに太陽は消えるであろう	391
失楽園記	401
坐骨神経痛と孤独	409
金魚屋と選挙屋	413
ハイ・ファイ流行	418
本を読みながら	425
孤独と愛情	433

ある老婆の思い出	439
お臍 へそ についての妄想	445
ユートピア	448
転矢 せんし 気	453
一挿話	457
二つの純粹さ	459
酒について	461
美人の顔	463
姓 名	465
孫について	467
娘について	469
息子について	471
女優と息子	473
名僧智識を求める心	477
若い叔父さん	479
父と子	481
除夜の鐘	483

元いた家

485

パリの記念

487

b あのこと

春日抄

490

宿命とは因果律だということなど

501

『インテリは生きていられない』を読まされて

507

偽日記抄 三（一九五三年）

520

生きている教師

529

偶感集
中卷

端 書

本『偶感集』中巻に収められた雑文は、一九四九年（昭和二十四年）から一九五五年（昭和三十年）までの間に書き綴った雑文のなかから二宮敬氏と大江健三郎氏とが選んでくださったものを土台にして、辛うじて再読に耐えるかもしれないものを更に私が選び出したものである。再録しなかったものは、あまり幼稚すぎ乱雑すぎて再録に値せぬと考えたものに外ならない。上巻において、「不惑の年」にあっても惑い続けている私の姿が露呈されているとすれば、本中巻は、「天命を知る」べき年に達して居りながらも相変らず意地きたない心根の持主だった私の姿を見せてくれるだけである。もっとも、「天命を知る」という言葉が、諦観に達するとか、あきらめるとかいう意味だけだったら、若干その萌^もしは、ようやく見られるのかもしれない。遅^{おそ}蒔^まきすぎるが。

本巻中に収められた雑文の一つの「附記」に記したように、私は、匿名批評家から、「お前は、今までは共産党の檀家代表みたいだったが、それから少しは進歩したようだ」と言われるようになっていた。これは、今述べたような「天命の知り方」を心得られるようになった結果なのかもしれない。

全体を二つに分け、Aには、一九四九年から一九五一年までの雑文を集めた。この区分には、格別な深い意味はないのだが、一九五一年には、ダグラス・マッカーサー大將が、日本再軍備の必要を説いたし、サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約が調印されたということを、私は思い出したからに外ならない。Bに収録された雑文

は、一九五二年から一九五五年にかけて綴られた。**A・B**各々を、更に**a・b**と分け、身辺雑記類のものを**a**に、あの頃の世のなかを思い出させるような文章を**b**に収めた。しかし、この**a・b**の区分は、決して厳密なものではない。

反古同然の旧稿を整理しながら、「臆面もなく……」という反省と羞恥とを抱くことには変りはないのであるが、一方では、これが「あの頃」の私であったという感銘を深くして、身動きができないような思いでもある。そして、この思いのなかには、なつかしさもあることを、せめて赦していただかねばならない。私にも、たった一つの生命しか与えられていなかったのであるから。

一九七〇年一月

渡辺 一夫 識

A

偶感集（一九四九年—一九五一年）

a

折にふれて（一九四九年—一九五一年）

辰野先生のこと

先生についてなら、外にいくらでも剴切的確なことを書ける方々が居られる筈だ。僕のごときは所詮、よしのずいから天井をのぞくの類に外ならぬ。ただ責をふさぐために、一つ二つ思いついたことを記すことに止める。

学生時代に僕たちは、講義の後、先生を無理やりにひっぱって青木堂の二階などへ行き、先生を囲んで雑談放談したことがしばしばあった。丁度、先生が新鮮な文体と豊かな味わいを持った論攻や随筆を発表し始めて居られた頃だったので、我々は学生の特権を大いに濫用して、先生がまだ筆にされないでいる新智識を、あわよくば引き出そうとしたわけだし、更に、あのようにシツクな文章を書かれる方法なり秘密なりを教えていただくなどと、大胆不敵なことをも考えていたわけである。

或る時、僕は、先生に、「先生は、どういふものを手がかりにして、ものを書かれますか？」と、下っ端の新聞記者みたいなことをお訊ねすると、先生は、実にさりげなく、「本を読んでいてね、感動した一句に出会ふと、それを何度でも読み返し、じっくり考えるんだがね」というようなことを答えられた。

先生が分厚いフランス文典を丹念に読破されているのに、文法のブの字も語られず、小ラルウース辞典の「名詞集」をほとんど全部暗記して居られるらしいのに、それらしいことをおくびにも出されないでいるということはい